Lifestyle Design Center ANNUAL REPORT 2021

生活工房 アニュアルレポート2021

April 2021 - March 2022

第一回目のワクチン接種。待機時間に目眩までいかない頭痛までいかないけれど浮くような感覚があり異物が身体に入ったことを実感。必要悪。階下で「色覚を考える展」をしていたので観た。小さいスペースだけど生活工房のすることはいつも面白い。4枚目は犬の色覚と目線で外界がどう見えているかの体験　7月25日

「色覚を考える展」へ。新生児、2ヶ月、8ヶ月、1歳の見え方の違いは興味深い。新生児は無彩色で見え方もボンヤリ。2ヶ月で色がつくけど大人とは違う見え方。1歳でようやく大人と同じように見える感じ。親の顔見て笑った❣️と思ったのはムスメが2ヶ月の頃だったけど、あんまり見えてなかったのね🤭　8月7日

食材買いに出かけて、少し涼めるかなとキャロットタワー上がってみたら、絶賛西日直撃中。下の階で安西水丸展やってたの思い出したので覗いてみたら割と良かった。　7月18日

課題を放って『安西水丸ポスター展』へ。行ってよかった〜〜〜🐻❄️　7月18日

三茶まで来たので安西水丸さんのポスター展見たかったが休みだった。外から中を覗く。安西さんとは接点がなかったけど、傍から見てて楽しい方だった。　7月5日

三茶でやってる安西水丸ポスター展を覗いてきた。まさかの江釣子ショッピングセンター(故郷)のポスターが展示されていて胸アツ。資生堂のお隣✨　7月17日

ウチからすぐ近くの生活工房ギャラリーで『安西水丸ポスター展』をやっていたのでお昼ご飯の買い出しついでに立ち寄る。とても良かった。生活工房ギャラリーの展示はいつも入場無料。生活工房ギャラリーの企画はいつも面白く、なんだかんだ言っても三軒茶屋から離れられない理由の一つ。　7月9日

観劇前にキャロットタワーへ
すっきりした線柔らかい線
何気ない小物が魅力的に見えて
小さいギャラリーながら物販も
あり大満足
安西水丸ポスター展　18日まで
7月11日

世田谷文学館での展示に併せてのスピンオフ企画みたいです。水丸さんの作品はほんわか温かさが感じられて好きだな　ほんとにユーモアと哀愁あふれる世界へと誘ってくれますね　生活工房ギャラリーの展示は、以前のしめかざり展の時にも記しましたが、興味深い好みの企画が多くて秀逸です。入場も無料ですし　昨日は6日振りに酒飲んで午前中の内から飲み始めて、戻って来て酔った状態で見たので、シラフの時にまた行きたい　ゲリラ豪雨の前に帰宅できたのは良かった　#安西水丸ポスター展　#三軒茶屋　#キャロットタワー　#安西水丸　#田都🍺🍻　#最高最高リフレッシュ💡 #逆さ楽天本社ビル　毎日の晩酌が楽しみだった水丸さんは、とある雑誌のインタビューで、“酒のアテが無くなったら、最後は塩を舐めながら飲める”とおっしゃっていた。印象に残ってる　7月12日

先日地獄の14連動最終日帰りに　水丸さんのポスター展に行って参りました！　笑っちゃうくらいの大雨の中　地下鉄から地下通路で移動できるありがたさ🙏🙏🙏　そしてなんと　写真撮り放題の太っ腹👍　私は村上春樹さんのエッセイが好きで　その挿絵をよく担当されていた水丸さんのファンになり　帰国したら水丸事務所の事務員さんをやりたいと思ってたくらいなのですが←帰国した時は幼児を2人抱えていて夢は叶わず　水丸さんのエッセイや小説も　赤坂とか青山とかよく出てきたし　母校も出てきたりするので余計に親しみ深く　そしてこの絵のなんとも言えないほんわかさが大好きなのであります！　世田谷文学展での展示も絶対行きたい！　けど休館日と私のお休みの日が同じという😢😢😢　でも頑張る！　マグネットとか買って　ウキウキしながら外に出たら　やっぱり雨は　まだ降ってて　折角ロブションで買ったバゲットをどう死守するか悩んだ日曜日の午後でした〜　#安西水丸　#安西水丸ポスター展　#三軒茶屋　#キャロットタワー　#mizumaruanzai　#illustrator　#carrottower　#sangenchaya　#桃代党　7月13日

通勤中にポスターを見て気になってたのでちょこっとお邪魔。世田谷文学館で開催中のスピンオフ企画との事で展示数は少な目ですが、するっと眺めてちょっとほっこり^ ^　気分転換終了。　#安西水丸ポスター展　#安西水丸　#キャロットタワー　#生活工房　#生活工房ギャラリー　#三軒茶屋　#つぼ散歩中　7月14日

こいぬま歯科

代沢十字
Daizawa Cross
アマノ動物病院
八幡神社

デニーズ

もくじ

生活工房アニュアルレポート2021

Lifestyle Design Center Annual Report 2021
April2021-March2022

11 展覧会 事業報告
12 大平農園と畑のレシピ帖展
13 安西水丸ポスター展
14-15 色覚を考える展 ヒトと動物の色世界
16 春日明夫コレクション アメリカン・トイズ since 1920s 暮らしと時代を映す玩具展
17 生活工房アレコレ2021　8ミリフィルム常設上映
18-19 日本今ばなし きいろいカラス
20 市民活動支援コーナーの日々展2022

21 特集 生活と記録の問答集
22-23 時短レシピから省かれたのは 本当に時間だけ？　小桧山聡子
24 日記に残すこと、残さないこと。どうやって決めているの？　植本一子
25 動物や植物も記録するのかな？　片野晃輔
26-27 生活を記録してきた先輩って？　大竹嘉彦
28 生活の記録を集めると、何が浮かび上がる？　辻本力
記録することで、見えなくなるものって？　松本篤
29 生活を記録することに意味はあるの？　末澤寧史
30-31 どうして人は、何かを残したいと思うの？　菊地暁
32 日々の実践を積み重ねた先にあるものって？　平野公子
33 時を超えて伝える方法とは？　吉田勝信
34-35 生活と記録を考えるBOOK REVIEW
えほんのみせ ぱっきゃまらーど／クラリスブックス／古書ビビビ／七月堂古書部／TSUTAYA三軒茶屋店／日記屋 月日／nostos books／本屋 B&B
36 編集後記

37 ワークショップ／セミナー 事業報告
38-39 どう？就活 自分と仕事の出会い方
40-41 暮らしの創造 団地文化から考える公・共・私
42 今年はオンライン開催だよ！ 第20回おはなしいっぱい
43 世田谷アートフリマ presents 1DAYワークショップ
44 豊かなことばの世界 朗読講座

45 地域と市民活動 事業報告
46 ちかくのとーく vol.00　みんなで話す、世田谷の市民活動のこと
47 穴アーカイブ
せたがやアカカブの会／エトセトラの時間 見えるものと見えないものを語る会
48 移動する中心｜GAYA
世田谷市民活動支援会議
49 市民活動支援コーナー

50 生活工房の一年／フライヤーコレクション
51 数字で見る生活工房
52-53 施設ガイド
54 生活工房とは？
55 生活工房の事業

巻頭写真について（pp.1-9）
撮影：澤木亮平（写真家、世田谷区在住）　暮らしの一場面から、まちの営みが見える風景、そして生活工房へ。澤木さんの視点で世田谷における「生活」を切り取っていただきました。

30代女性の声●生まれも育ちも世田谷ですが、こんなにも有機農業の歴史があるとは知りませんでした。

EXHIBITION

撮影：矢郷桃

大平農園と畑のレシピ帖展

伊藤ハムスター氏による壁面グラフィック。土のなかの出来事と地上の事象の連関を解説

採取時期の異なるハチミツの比較。
開花する植物の変化がハチミツにも影響を与える

「若葉会」の方々に聞いた、旬の野菜を長くおいしく楽しむ知恵を紹介

土のなかの出来事と今日のあなたの食卓

等々力に400年続く大平農園を通して、土と人、農業とのつながりを紹介した展覧会。

大平農園は、昭和20年代に当時珍しいハウス栽培をいち早く導入するなど、篤農家（とくのうか）として近代農業を先駆する存在だった。しかし、それゆえに起きた農薬の健康被害、11代目の大平博四氏による無農薬・化学肥料を使わない農業への大転換、生産緑地としての農地存続など、その歴史には近代の都市農業がたどってきた道が記されている。

本展では、大平農園や地域の農業の歴史をパネルなどで展示し、畑の土壌の微生物・野菜・動物・人間の円環を、人気イラストレーター・伊藤ハムスター氏の楽しいイラストから学んだ。また大平農園と志をともにする他県の農家、それを支持する消費者からなる「若葉会」の方々から聞いた、旬の野菜を長くおいしく楽しむ知恵も紹介。土のなかの出来事と毎日の食卓が地続きであることを再認識する機会となった。

関連企画では大平農園を舞台にしたドキュメンタリー作品を3本立てで上映し、城南小松菜（大平農園産）の販売も行った。

DATA

開催日時
2021年3月2日㊋～6月27日㊐
9:00～21:00（祝日を除く月曜休み）
※緊急事態宣言発出にともない、4月25日～5月31日は臨時休館。そのほかの緊急事態宣言期間中は閉室時間を20:00に変更した

会場
生活工房ギャラリー

来場人数
7,476名

協力
大平農園、若葉会、中野詩、後藤逸男（東京農業大学名誉教授）、等々力の歴史を語り継ぐ会、渡辺宏（株式会社ピーハイブジャパン）、久保田裕子、世田谷区農業青壮年連絡協議会

関連企画
ドキュメンタリー上映会

開催日時
4月10日㊏・11日㊐
13:30～17:00

会場
ワークショップルームB

ゲスト
森信潤子（映画監督）

上映作品
『大平農園 401年目の四季』／『根ノ国』／『みんな生きなければならない』

参加人数
85名

参加費
無料

EXHIBITION

30代女性の声●無料＆小規模だったので、もうひとつの世田谷文学館での有料展示に友人を誘うためのお試しに丁度よかった（友人はもうひとつの方も行きたいと言ってくれた）。

安西水丸ポスター展

会場風景　撮影：佐藤基

撮影：佐藤基

特設ショップコーナー　撮影：佐藤基

フライヤーの代わりに制作したステッカー

DATA

開催日時
2021年7月3日㊏～7月18日㊐
10:00～18:00（月曜休み）

会場
生活工房ギャラリー

来場人数
10,643名

企画協力
安西水丸事務所、クレヴィス

世田谷文学館との連動企画

世田谷文学館で開催された「イラストレーター　安西水丸展」（2021年4月24日～9月20日）との連動企画。

同展は、小説やエッセイの執筆、漫画・絵本の制作など、イラストレーションのみならず幅広い分野で活躍した安西水丸の仕事を、総数500点以上の原画や資料によって多面的に紹介する回顧展。その一環として、生活工房ではポスター作品約25点を展示した。

生活工房と世田谷文学館は同じ世田谷区内と言えども電車を利用して45分ほどかかる距離にある。せたがや文化財団内の2施設で連携することにより、容易には文学館に行き難い地域住民へ鑑賞機会を提供するとともに、相互に来場者が行き来する相乗効果を生んだ。

また、会場の一角に設けた特設ショップでは展覧会のオリジナルグッズを販売し、約2週間の短い会期にもかかわらず、2,000点以上の購買を記録した。

10のコーナーをめぐりヒトと動物の色覚の違いを学ぶことができる　撮影：松尾宇人

イヌやトンボの色覚をVRで体験する様子

ヒトと動物の色覚の違いをタッチパネルで比較できる作品

レクチャー：最新の色覚研究について解説する講師の川端裕人氏

ワークショップ：ステンドグラスの仕上がりを見る参加者

EXHIBITION

色覚を考える展
ヒトと動物の色世界

みんな違う色世界に生きている

本展は、生き物の「色覚」をテーマにした、アートとテクノロジーの融合による体験型展覧会である。会場には、動物の色覚を再現したVR、ヒトと動物の色覚を比較するタッチパネル式の作品、ヒトの4種の色覚を体験するiPadなど、色覚多様性とその仕組みについて理解を深めるインタラクティブな作品が並んだ。

ワークショップでは講師の陳軍氏とともに、偏光板とセロハンでステンドグラスをつくり、動物の色世界について楽しく学んだ。レクチャーでは講師の川端裕人氏が、多様な色覚が存在する世界に生きる私たちが、どのように相互理解して違いを楽しむことができるかについて、先端の研究事例をもとに解説した。

展覧会は、本展のガイドブックを片手に自由研究の素材を求める家族連れのほか、教師、美大生、眼科勤務者、色覚に特徴のある当事者など、さまざまな方の注目を集め、5万人を超える来場者数を記録。普段見慣れた世界に、知られざる景色が存在していることを改めて体感する機会となった。

展覧会およびレクチャーの記録映像はウェブサイトで公開中。本展のガイドブックもダウンロードできます。

60代女性の声●
人間以外の生物の見え方や光の色、あたりまえと思っていたものが、実はそうではなかったという認識の揺さぶりが心地よかった。素晴らしかったです！

DATA

開催日時
2021年7月24日㊏～8月29日㊐
9:00～21:00（祝休日を除く月曜休み）
※緊急事態宣言期間中は閉室時間を20:00に変更した

会場
生活工房ギャラリー

来場人数
54,019名

共催
東京工芸大学 色の国際科学芸術研究センター

企画・監修
野口靖（東京工芸大学 色の国際科学芸術研究センター）

監修協力
川端裕人（サイエンスライター・小説家）

協力
浅田一憲、ハコスコ、河村正二、中央大学山口真美研究室、日常探検LABO、Klaus Schmitt、Martin Stevens、The Natural History Museum (London)〈順不同〉

助成
令和3年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業

関連企画1
VR体験

開催日時
8月1日㊐・8日㊐・14日㊏
13:00～18:00

会場
生活工房ギャラリー

参加人数
のべ767名

参加費
無料

関連企画2
ギャラリートーク

開催日時
8月1日㊐
①14:00～14:30／②16:00～16:30

会場
生活工房ギャラリー

講師
野口靖（東京工芸大学 色の国際科学芸術研究センター）

対象
小学生以上

参加人数
16名

参加費
無料

関連企画3
レクチャー
「色」という感覚
多様な色覚を楽しむために

開催日時
8月8日㊐ 14:00～16:00
※YouTube LIVEによるオンライン開催

講師
川端裕人（サイエンスライター・小説家）

対象
中学生以上

参加人数
24名

参加費
無料
※新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、YouTube LIVEによるオンライン開催とした。また、8月9日～29日の期間にアーカイブ配信を行った（再生回数677回）

関連企画4
ワークショップ
不思議なステンドグラスをつくろう

開催日時
8月14日㊏ 14:00～15:30

会場
セミナールームAB

講師
陳軍（東京工芸大学工学部工学科教授）

対象
小学3～6年生

参加人数
29名

参加費
1,000円

40代女性の声● 子どもと一緒に楽しめる展示会・アート展はとても貴重なため、子どもの方から「行きたい！」と言ってきたので来場しました。

春日明夫コレクション アメリカン・トイズ since 1920s
暮らしと時代を映す玩具展

8mmフィルムカメラやトランジスタラジオなど、新たに登場した家電製品をモチーフにした玩具
撮影：鈴木渉

会場風景

ワークショップ：紐で手足が動く人形をつくる様子

DATA

開催日時
2021年9月7日㊋～12月19日㊐
9:00～21:00（祝日を除く月曜休み）
※緊急事態宣言期間中は閉室時間を20:00に変更した

会場
生活工房ギャラリー

来場人数
42,887名

監修
春日明夫（東京造形大学名誉教授）

関連企画1
レクチャー
アメリカ玩具とキッズデザインの100年

開催日時
10月3日㊐ 14:00～15:30

会場
セミナールームAB

講師
春日明夫

参加人数
46名

参加費
500円

社会を映す鏡としての玩具

2018年に開催した「人はあそぶ―メキシコ民芸玩具展」に続き、子どもの玩具を通して外国の暮らしや文化を伝える展覧会の第２弾。造形教育学の視点から世界の玩具を収集する春日明夫氏のコレクションより、フィッシャー・プライス トイズ（現・フィッシャープライス®）の製品を中心に、1920～1980年代にかけてのアメリカの玩具約150点を紹介した。

世田谷区が東京オリンピックのアメリカ合衆国ホストタウンになったことを受け、当初は2020年5～7月の開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大による臨時休館などにともない、1年延期しての開催となった。

カメラや電話、トランジスタラジオなど、玩具のモチーフとなる家電製品の移り変わりや、素材の変化などに着目し、フィッシャー・プライス トイズの製品を通じて見えてくる、アメリカの生活を紹介した。また、後半では戦中・戦後の同時代の日本の玩具も展示し、異なる社会や文化のもとに生まれた玩具を対比することで、その歴史を振り返った。

関連企画2
ワークショップ
たのしくダンスするハンペルマン人形をつくろう

開催日時
11月7日㊐
①13:00～14:30／②15:30～17:00

会場
セミナールームAB

講師
春日明夫

対象
5歳以上～小学3年生の児童とその保護者、2人1組

参加人数
31組

参加費
500円

生活工房アレコレ2021
8ミリフィルム常設上映

DATA

開催日時
2021年4月8日㊍～2022年4月7日㊍
9:00～21:00（祝日を除く月曜休み）
※緊急事態宣言期間中は閉室時間を20:00に変更した

会場
生活工房ギャラリー（階段下）

来場人数
59,225名 ※3月31日時点

企画制作
remo[NPO法人記録と表現とメディアのための組織]

撮影：松尾宇人

生活工房の〈アレやコレや〉を小さく展覧

2021年4月、生活工房ギャラリーの片隅に少し変わった展示コーナーが生まれた。その名も「生活工房アレコレ」。展示台として使用した什器は、建築デザイナーの板坂留五氏が設計した「アレコレラック」。市販のクリップと組み合わせることで自立する仕組みになっており、チラシラックなどでも活用している。

生活工房に眠る事々物々を紹介した「生活工房バックヤード展」（2021年1～2月開催）を受けてはじまった本コーナーでは、開催中の展覧会やイベントに関する資料を公開していく。今年は、市井の暮らしの記録 “8ミリフィルム” を活用するプロジェクト「穴アーカイブ」の一環として、昭和の映像を上映。毎月8日、歳時記をめぐるように映像を入れ替えながら、ご来場の方々から映像をきっかけに思い出したエピソードを募った。

集まったエピソードは、ウェブサイト「世田谷クロニクル」やSNSなどでも紹介。「せたがやアカカブの会」や「移動する中心｜GAYA」（pp.47-48）とゆるやかに連動しながら、1年かけて上映した。

『子どもNo.4』
（1964年頃／自宅［南鳥山］、甲州街道、井の頭公園／31分43秒）

『ラジオ体操』
（1937年／住吉神社［三重県］／7分28秒）

「移動する中心｜GAYA」で作成した冊子も配布

『松陰神社、双葉園、雪の日』
（1975年1～2月／松陰神社、若林公園、向ヶ丘遊園／18分19秒）

会場風景　撮影：Hideto Maezawa

絵本『きいろいカラス』（2021年／原画）より「紅葉の手紙」

会場内のガラス面に貼られた手紙　撮影：Hideto Maezawa

絵本に登場する「家」を会場に再現　撮影：Hideto Maezawa

EXHIBITION

日本今ばなし きいろいカラス

70代の声●
絵本のやさしさを味わうことができました

DATA

開催日時
2022年1月8日㊏～3月6日㊐
9:00～21:00（祝日を除く月曜休み）

会場
生活工房ギャラリー

来場人数
19,897名

助成
芸術文化振興基金

関連企画1
ワークショップ
『きいろいカラス』のアニメーションをつくろう！

開催日時
2月6日㊐
①10:00～13:00／②15:00～18:00

会場
セミナールームAB

講師
椎木彩子（美術家・イラストレーター）

対象
小学1年生以上
（小学3年生までは保護者同伴で参加）

参加人数
15名

参加費
500円

関連企画2
アーティストトーク
お家で話す

開催日時
3月6日㊐ 18:30～19:30

会場
生活工房ギャラリー

出演
椎木彩子、村上慧（美術家）

参加人数
11名

参加費
無料

絵本『きいろいカラス』撮影：akaseyuki

2022年の「今ばなし」が、いつか未来の「昔ばなし」になる。

2020年に世田谷区芸術アワード“飛翔”生活デザイン部門を受賞した美術家・イラストレーターの椎木彩子氏による展覧会。本展で発表した絵本『きいろいカラス』は、同年に開催したワークショップをもとに、さらに1年かけて創作したものだ。手紙を介した2020年のワークショップについては、展覧会「未来に伝えるせたがや今ばなし」（2020年10～11月開催）でも紹介した。

絵本『きいろいカラス』は、大雨によって外出自粛を余儀なくされた主人公「イロさん」のもとに、黄色いカラスが手紙を届けるシーンからはじまる。世田谷区の地名である「烏山」から着想を得て生まれた架空の「カラス山」を舞台に、外出が叶わない人々の交流が展開していく。その光景は、現在の私たちの暮らしとも重なって見えるだろう。

本展では、絵本原画22点や「カラス山」のジオラマ、ラフスケッチなどの制作過程を展示したほか、絵本に登場する「イロさん」の小さな家も再現。また、来場者から募って会場に掲示した手紙〈100年後に生きる人へ〉は262通にものぼり、熱心に読みふける来場者の姿も多く見られた。2022年の物語が〈昔ばなし〉と呼ばれる頃、私たちの暮らしはどのように変わっているのだろうか。

絵本創作の一環として制作した「カラス山」のジオラマ
撮影：Hideto Maezawa

ガラス面に物語を書く作家の椎木彩子
撮影：Hideto Maezawa

EXHIBITION

市民活動支援コーナーの日々展2022

60代男性の声 ● 各団体の交流が生まれ、施設の使われ方がよくわかる展示

印刷物を再利用した作品　撮影：山本華

会場の様子　撮影：山本華

市民活動の多様な取り組みを伝える企画展

約3年ぶりの「市民活動支援コーナーの日々展」。新型コロナウイルス感染拡大防止対策に考慮しながらの開催となった。

市民活動支援コーナーを利用するさまざまな団体の活動と日常を、支援コーナー運営団体スタッフがレポーターになり紹介する展覧会企画。団体の活動写真やプロフィール、コメントなどを交えてパネルで展示。あわせてフラワーアレンジや手芸品など、支援コーナーで作品制作をする団体の作品も展示された。改めて市民活動の幅広さを再認識するとともに、穏やかな交流の場としても好評だった。

DATA

開催日時
2022年3月16日㈬～4月17日㈰
9:00～21:00（祝日を除く月曜休み）

会場
生活工房ギャラリー

来場人数
3,115名 ※3月31日時点

企画・運営
NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）

参加団体
えこひろば、スペイン友の会、うるしアート朱の会、フラワーサロンROCOCO、Eye CUBE、デジタル勉強会、ニットサークルティンク、絵画造形を楽しむ会、フルーツバスケット、おしゃべりHAIKUの会、アストラル・イングリッシュ・サークル、アニマシオントイ、めいめいロボット工房、フラワートールペイントクラブ

トールペイントの作品　撮影：山本華

手編みのニットが並ぶ　撮影：山本華

生活と記録の問答集

そもそも
生活って記録
できるの？

生活工房は今年で25周年

「文字や形に残らない、
暮らしの営みは記録できるのだろうか？」

料理家やサイエンティスト、民俗学者などなど、
さまざまな分野の実践者に、生活と記録をめぐる、
素朴な疑問を投げかけてみました。

それぞれの言葉から浮かび上がる、
生活や記録の輪郭、答えなき答えを楽しみながら、
生活を記録する意義について考えてみませんか。

読者のみなさまへ

寄稿文のまわりの余白には、読みながら思い出した、
生活や記録にまつわるアレコレを自由に書き込んでください。

時短レシピから省かれたのは本当に時間だけ？

写真：志鎌康平

小桧山聡子さんの答え

レシピに現れる時代性と身体性

料理のレシピっておもしろい。改めて最近そう思っている。限られた文字数のなかで何を省略し何を書き記したか。その作者がどう料理と向き合っているのか、試行錯誤の跡とともに、作者の身体性までも垣間見れる気がするからだ。その行間にあるものを想像しながら、書店に並ぶレシピ本の頁をめくってみるといい。もしくは古本屋で昔のレシピを眺めるのもいい。物流や台所環境も違うから、最近のあたりまえとは違う記述があったりして、その時代の空気も読むことができる。そうやって料理の「正解」ではなく、料理の「選択肢」を開いていくようにレシピを読むとおもしろいと常々思っている。

今の主流は「時短」レシピだ。現代人はとても忙しい。なぜこんなに忙しいのだろう？と立ち止まる隙もないくらいに忙しい。だからとりあえず、手っ取り早くこなす術を教えてほしい。最短ルートを検索したい。倍速で映像を観てざっくりわかればいい。そうやって、とりあえず無自覚に時短を繰り返してきた。とりあえずの積み重ねはますます、感じること考えることを遠ざけ、さらに省略を加速させる。繰り返し心を動かさずに扱っていると、食材も、ただのものになる。料理して食べる営みをどこまで省略するのか？　時短した時間で何をするのか？　時短が悪いのではなく、何のための時短かわからず無自覚に省略し、できた時間でスマホをいじっているという状況が往々にしてあるのではないか？と感じるのだ。

もちろん、寝る時間もないくらい物理的に困窮しているという現状もあると思う。日本でも、7世帯に1世帯が相対的貧困状態であると言われている。食の問題は社会の問題と根深くつながっているし、単純にひとつの視点から語れるような話ではない。

しかしだからこそ、「料理して食べる」って何だろう？という簡単に答えの出ない大きな問いに、今一度立ち止まってみる必要があるのではないかと切実に思うのだ。

意識を向ける先が目まぐるしく現れては消え、目の前のことにじっくりと向き合うことができなくなってしまっている今、日々の「義務」としてではない眼差しで食を見つめる機会がつくれないものか。料理して食べる営みをもっと自由にほどき、選択肢を広げるような「レシピ」がつくれないものかと考えている。

時短ではなく余談だらけのレシピ

そんな想いのもと実験的にいくつか、既存のレシピからあえて視点をずらしたレシピの提案をはじめている。

ひとつ目は「食材と戯れ遊ぶレシピ」。“野菜を洗って茹でる”と、1行でも書ける工程を、あえて2,000文字くらい使って記述する。完成させることより、その過程のやりとりに目線を合わせる寄り道案内のようなレシピだ。その時その季節に集まった食材（＝生きもの）に触れ、息を合わせている時間が、すでに栄養なのではないか。やり方を指示通りに追うことでなく、美しいとか、気持ちいいとか心が動いている状態こそ料理なのではないか。そんな、食材と戯れ遊ぶように料理するための案内レシピ。

もうひとつは、「余談だらけのレシピ」。現代ではさまざまなことがぶつ切りになっていて、大きな循環を想像しづらい。料理をきっかけにつながっていく多様な関係性の広がりを、調理工程を追いながら、時に壮大に脱線しつつ、時短ではなく余談たっぷりに記していくレシピ。煮込んでいる鍋を覗くとき、そこには多様な窓が広がっている。

そのほか、ひとつの同じレシピを1年間繰り返しつくり、その日のレシピを記述していくものや、共通のひとつのレシピをさまざまな人たちの視点で、料理し読み解き記述してもらうレシピ。これらは、アレンジの多様性の提案ではなく、毎日の繰り返しのなかに現れる「ゆらぎ」をすくい取ることや、それぞれの人間の身体を通して捉えられる見え方・感じ方のズレを垣間見ることで、料理に求める「正解」から自由になるためのレシピ。食材とは生きもので、人間も生ものである。体調や感情を抱え、ゆらぎ合いながら料理する。だからこそ、おいしいに正解はないのではないか。

「レシピ」という形式をあえて使いたいと思うのは、台所からさまざまな問いかけが広がっていくことに期待しているからだ。台所は毎日静かに開かれている。

今ある「あたりまえ」に囚われすぎず、料理し食べる営みをもっと自由に。答えのない問いを問い続けていきたい。

こびやま・さとこ
1980年東京生まれ。多摩美術大学卒業。山フーズ主宰。「食とそのまわり」にある、もの・こと・感覚などをすくい上げ、考察・研究・創作・ご提案し、さまざまなかたちでみなさまの身体へお届けすることを生業としている。ケータリング、ワークショップ、商品開発、講師など多岐にわたって活動。yamafoods.jp

日記に残すこと、残さないこと。どうやって決めているの？

植本一子さんの答え

そもそも私が日記を書きはじめたのは、娘が生まれてからでした。その頃はインターネット上のブログサイトを使い、誰でも、世界のどこからでも読めるかたちをとっていました。言葉を変えれば、誰でもいいから読んでほしかったのです。目の離せない子どもとの生活はかけがえない日々であり、また、社会から自分が切り離されたような寂しさを同時に感じました。日記を書くことは、育児の記録としている面と、自分がここにいる証明の、ふたつの意味がありました。

ここまで赤裸々に書いてすごいですね、と言われることがよくあります。赤裸々という言葉を調べてみると、まったくのはだか・つつみかくしのないこと・いつわりかざらないこと、とあります。果たして自分の書いているものがそうなのかと考えると、自分ではあまりピンときません。私が書く上で大事にしているのは「自分」が感じたことを書く・残す、ということです。良いことも悪いことも、これは忘れてはいけない、と思うことを文字にします。それは何もかも包み隠さずすべてを書くことと同じ意味ではなく、その瞬間はすでに過ぎ去っており、掴みたいと思っても、書いた時点でどうやっても創作になってしまいます。書くという行為自体に、偽りや飾りがないことは不可能だと思うのです。

それでも、私は正直でありたいと思います。せっかく書くのだから、なるべく自分の本当の気持ちを残したい。気持ちが動く瞬間というのは、自分以外の他者が何らかの働きかけをしたときです。最初に娘との生活を書こうと思ったときもそうで、誰かの存在が、私に残したいと思える瞬間をいつもつくってくれています。もちろん、私が書くことで相手を傷つけてしまう可能性があり、そこにはかなりの注意を払っています。それは書く書かない以前に、人間関係の上で当然のことだと思います。

そう考えると、私と関わり、また、書くことを許してくれているまわりの人たちには、感謝しかありません。

うえもと・いちこ
1984年広島生まれ。2003年にキヤノン写真新世紀で荒木経惟氏より優秀賞を受賞。写真家としてのキャリアをスタートさせる。2013年より下北沢に自然光を使った写真館「天然スタジオ」を立ち上げ、一般家庭の記念撮影をライフワークとしている。

動物や植物も記録するのかな？

片野晃輔さんの答え

記録とは何だろうか？　記録写真、記録映像、記録音声、記憶……それは媒体を問わず、あるものごとを残して伝えるための行為と言えるのではないか。置かれた環境、見えた景色、浮かんだ言葉、発した音。記録とは、そうした状況の表現で、それ自体を残すことに重きを置いた行為のひとつだと私は考える。

生物は置かれた環境に適応し、またそれ自体も環境を形成する。だだっ広い平野に群生するある植物は、吹きつける風にやられまいと葉を小さくし、寒さに脅かされるある微生物は、身体を凍らせないための物質を分泌するようになった。このような特徴は、遺伝子などを媒体とした環境や状況の記録とも言えるだろう。
「あら、こんなところにカビが。先週までいなかったのに」
「この辺の動物はやけに人間慣れしているな」
生物の存在や行為というある種の記録から、周囲の時間、湿度や気温の変化、風の動き、関係性などさまざまな情景を読み取ることができる。

遺伝子や形状、行動といった、それぞれ残る時間や変異のしやすさ、言い換えれば忘れやすさの異なる媒体でそれぞれ記録する行為は、マルチメディアな表現だ。
「この村では美しい景色が見られる。そうだ、詩を書こう」
「ゲノムを観察するにはあの手法を使うといいらしい。引用してみよう」
どちらも置かれた状況の記録であり、こうした表現がさらに記録、引用されることでものごとはより残りやすくなる。

筆者は、生物学の民主化というテーマで市民科学と生物学の関係性などを研究することもあるが、こうした世界の見方は、あらゆるものが何かとつながっているという複雑な関係性を発見するおもしろみに溢れている。記録にはそうした複雑な関係性が含まれている。まるで生物の系統樹や生態系の相互作用のようだ。生物という切り口で世界の関係性を見ることで、人類が世界の鑑賞者としてだけではなく、表現者として活躍できる世界や関係性が筆者の探求対象である。記録していこう。

かたの・こうすけ
1997年新潟生まれ。中学時代、母親の乳がんがきっかけで分子生物学に関心をもち、DNAメチル化やIgE抗体を独学で学び、高校時代には企業や大学のラボを利用し個人で研究。高校卒業後、MITメディアラボ研究員に。現在は個人事業主として、「生命の連環を起こす」という思想を軸に分野を問わず研究活動を行う。

大竹嘉彦さんの答え（生活工房）

生活を記録してきた先輩って？

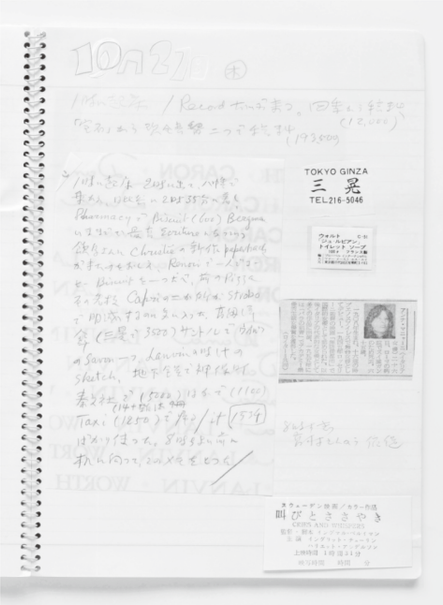


fig.1／1973年9月27日の日記

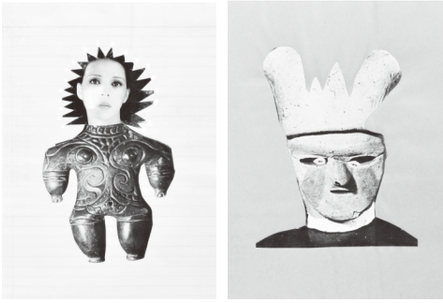


fig.2／コラージュの名手でもあった植草甚一。日記（1972年）の途中にも、洋雑誌の切り抜きを使ったコラージュが

1960年代後半から70年代にかけて、団塊の世代の若者たちから熱烈に支持された植草甚一（1908〜1979年）。映画、ミステリー、モダン・ジャズからカウンター・カルチャーまで、海外の幅広い文化を親しみやすい語り口で紹介した植草は、その生き方も唯一無二でした。

世田谷文学館が所蔵する総数1,200点にのぼる植草甚一コレクションには、並外れた記録魔だった植草の自筆資料が数多く含まれています。今回はそのなかから、魅力溢れる「生活の記録」の断片をご紹介します。

ぼくは散歩と雑学が好き

植草甚一はエッセイの導入において、しばしば本題に関連する身辺雑記をつづります。その話題を持ち出す動機や出来事を、そのまま文章にして本題へと至るスタイルは、植草流文体の真骨頂といえるでしょう。その最たるものが、全集「植草甚一スクラップ・ブック」の月報などにも掲載された日記です。身辺雑記のみの内容にもかかわらず、魅力的な読み物として成立している理由のひとつは、どこで何をいくらで買ったか、その内容と道程が細かく記され、そのまま散歩の記録となっていることにあります。掲載時には自身で清書・再構成をしているものの、原本となった実際の日記を読んでも、都市の遊歩のお手本のような日常が垣間見えます。〈fig.1〉

1時に起床　2時に出て、八幡で乗かえ、日比谷に2時35分に着く。PharmacyでBiscuit（600）Bergmanいままでで最高　Ecritureになっている　飯島さんにChristieの新作paperbackが来たのをおしえ、Renoirで一人でコーヒー　Biscuitを一つたべ、前のPizza屋の看板Capriの二か所がstroboで明滅するのに気に入った。高級洋傘（三晃で3500）サントノレでウオルツのSavon一つ、Lanvinの時計のsketch、地下鉄で神保町 泰文社で（14＋雑誌9冊）（5000）ほかで（1100）　Taxi（1250）で帰る／計1万3千ばかり使った。8時ちょい前に机に向って、このメモをとった《1973年9月27日の日記より》

Bergman
映画監督イングマール・ベルイマンのこと。このときの映画は『叫びとささやき』。

Pharmacy
日活国際会館（現ペニンシュラホテル東京）のなかにあったアメリカンファーマシーのこと。現在は丸の内、渋谷ほかで営業。

こんなコラムばかり新聞や雑誌に書いていた

さまざまな雑誌や新聞から原稿を依頼され、日々締切に追われる生活を送るなか、植草甚一が自作していたスケジュール表が、40点ほど残されています。不要になった厚紙や段ボールを利用して、むこう2週間程の締切と媒体名、テーマや進行状況などが書きつけられています。

日記やノートや手紙など、さまざまなものにシュルレアリスム的コラージュや絵を添えて、身のまわりすべてを植草ワールドに染めてしまう習慣はここにも顕在で、ジャン・コクトー風の線描が目をひきます。〈fig.4〉

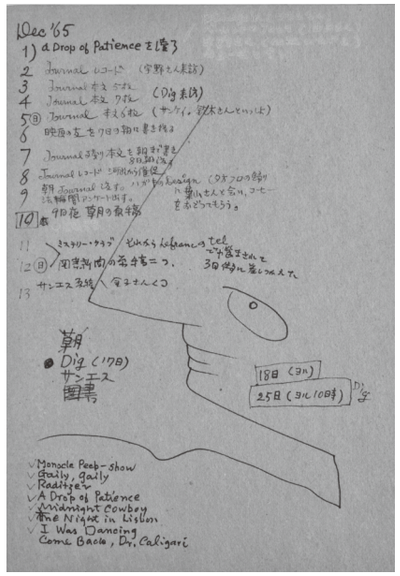
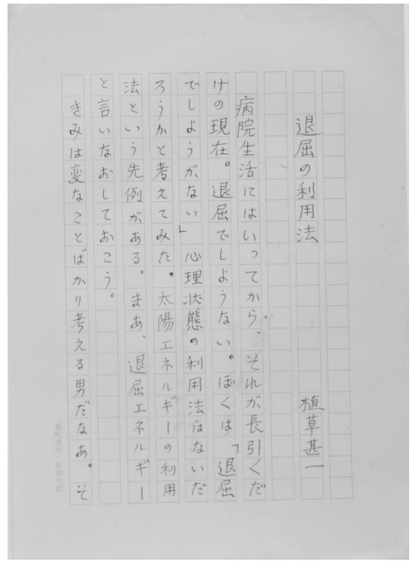


fig.4／スケジュール表（1965年）

退屈の利用法

1979年、70歳のときに心筋梗塞と脳梗塞を患った植草甚一は、リハビリのために伊豆の温泉病院に入院します。しかし、病院での日々は病気との戦いというよりもむしろ「退屈」との戦いでした。都市から離れ、大好きな買い物もできない日常は、退屈でしようがなかったようです。そこで、脳裏に去来するさまざまな空想や思い出を、「妄想の刈り入れ」「退屈の利用法」といった、ユーモアのある題名を付して文章化しました。生活を記録するだけでなく、物語に移し替えて客体化する、植草甚一らしい遊び心溢れる最晩年の原稿です。〈fig.5〉

fig.3／1970年代後半、小田急経堂アパート（世田谷区経堂）の自宅にて



退屈の利用法

植草甚一

病院生活にはいってから、それが長引くだけの現在。退屈でしようない。ぼくは「退屈でしようがない」心理状態の利用法はないだろうかと考えてみた。太陽エネルギーの利用法という先例がある。まあ、退屈エネルギーと言いなおしておこう。

きみは変なことばかり考える男だなあ。そ

fig.5／原稿「退屈の利用法」（1979年）

ウオルツのSavon
フランスの老舗ブランド「ウォルト」の代表的な香水「ジュ・ルビアン」のトイレットソープを購入した。

小見出しはすべて、植草甚一の著作タイトルからの引用です。
画像提供：世田谷文学館

生活の記録を集めると、何が浮かび上がる？

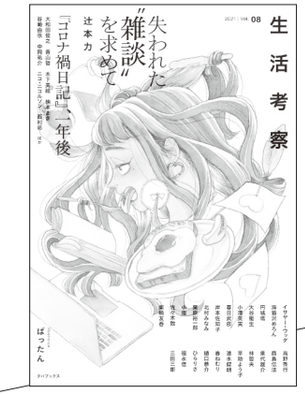
辻本力さんの答え

『生活考察』というエッセイ誌をつくっている。個々人の生活の記録と、それを起点とした思考の集積——ある意味、「生活」のショーケースのようなイメージだ。

誰にもある「日々の生活」のような、あたりまえのものを集めてどうする？と思う向きもあるかもしれない。でも、これが抜群におもしろいのだ。

ものすごくざっくりといえば、私たちの生活は「衣・食・住」、「起きて、活動して、寝る」といったあたりに集約される。しかし、そこには、実は非常に豊かな差異が潜んでいる。生活についての文章というのは、自身の暮らしの何にフォーカスし、どう切り取ったかの結果だ。その手つきには、書き手の想像力、ひいては「その人自身」が表れる。ひとつとして同じものはない。

生活における些事を、顕微鏡で眺めるかのごとく拡大し、細部を注視してみる。そのとき、世界の解像度は上がり、“あたりまえ”のアナザーサイドが見えてくる。このワンダーこそが、私の原動力なのだ。



『生活考察』Vol.08
（タバブックス、2021.12.22発行）
カバーイラスト：ばったん

つじもと・ちから
1979年茨城県生まれ。ライター・編集者。文化施設「水戸芸術館」を経て、2010年、生活と想像力をめぐる“ある種の”ライフスタイル・マガジン『生活考察』を創刊。近刊に、日記アンソロジー『コロナ禍日記』（タバブックス、編著）がある。

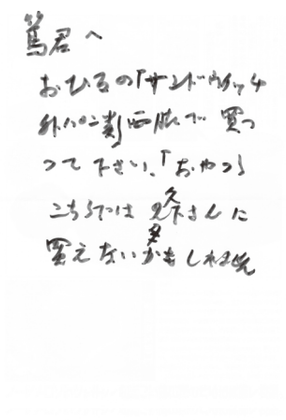
記録することで、見えなくなるものって？

9年前、実家の祖父が寝たきりになった。見舞いに行くたび、祖父と同居する祖母から昔のことを聞いた。白い軍服に憧れたこと。あと少しで「特攻」だったこと。納屋に眠るサーベルのこと。祖母の話はいつも同じところで途切れ、最初に戻った。音飛びしたレコードのように。

1年後、祖父が他界した。記録に残そうと思って、初盆の席上でICレコーダーを回した。祖母はいつもと違う話をしはじめた。実は、祖父と出会う前に文通していた意中の男性がいたのだ。家族のみんながその語りに面食らい、言葉を失った。祖父が死んで“たが”が外れたのだろう。ふとそう思い、しばらく経ったある日、実家に電話をかけた。父も母も口を揃えて言った。
そんなことあったっけ。全く憶えていなかった。まさかと思い、レコーダーを聞き直した。録音できていなかった。

二度とその話をすることなく、祖母は祖父のあとを追うように死んだ。私は人間が過去のなかへ失っていくものについて考えた。

松本篤さんの答え


篤君へ
おひるの「サンドウィッチ
外ハの二割西瓜で買っ
って下さい。「おやつ」
こちらでは 篤さんに
買えないかもしれない

祖母が著者に宛てた直筆メッセージ。記入内容、保管理由など、その一切を私は思い出せない

まつもと・あつし
1981年生まれ。remo[NPO法人記録と表現とメディアのための組織]メンバー。ひとりの女性の育児日記から東日本大震災からの11年をたどる回想録『わたしは思い出す』が2022年6月に刊行予定。

生活を記録することに意味はあるの？

末澤寧史さんの答え

「文化編年」と呼ばれる考古学の基礎研究がある。中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所がトルコ共和国の遺跡を舞台にその研究に取り組んでいる。といっても、知る人は少ないだろう。20年近くトルコと関わってきた僕も、2018年の取材で初めて知った。そして、その途方もない営為に大きな衝撃を受けた。

文化編年とは、わかりやすくは、世界史の教科書の巻末にある、あの折り畳まれた年表をつくることだ。世界史の年代は、新石器時代、青銅器時代、鉄器時代などと、その時代の特徴的な文明や文化で分けられる。

では、どうやって、区切られているのか。基礎となっているのが、19〜20世紀半ばに欧米の研究者が中近東でつくった文化編年だ。文化編年づくりは、通常の発掘調査とは大きく異なる。1つの遺跡を表層から底まで、文化層ごとにすべて発掘する。掘り出した遺物は一切捨てず、整理・分類していく。そんな地道な研究を今も行っているのが、日本の学術機関と知って驚いた。しかも、100年がかりの一大事業だという。アナトリア考古学研究所の文化編年では、毎年100万点以上の遺物が時代ごと、発掘した区域ごとに整理され収蔵庫に収められていく。遺物は、総計で数千万点以上にものぼる。調査の過程で、鉄の起源を変える歴史的発見などもあるのだが、「個別の発見には意味がない」と所長の大村幸弘さんは言い、度肝を抜かれた。

瓦礫のような生活の痕跡は、素人目には違いがわからない。しかし、遺物をずっと見つめていると、あるとき、歴史の境目が見えてくるのだという。そして、「文明の終わりは、いつも焼け野原が広がっている」と、大村さんは焼けただれた地層を背に語る。だからこそ、「大切なことは歴史の法則を知り、いかに未来を構想するか」だと。未来を見据えるためのものさしをいかにつくるかに文化編年の本質があるというのだ。そのための一次資料となる生活の痕跡は膨大さに意味がある。これからの文明を見通すものさしを手にするため、遠いトルコの国で、今日も発掘作業が続いている。

すえざわ・やすふみ
1981年札幌生まれ。トルコをフィールドに取材活動を行い、絵本『海峡のまちのハリル』（小林豊／絵、三輪舎）を創作。慶應義塾大学法学部法律学科卒業。同大学院文学研究科（東洋史学専攻）に在籍中、トルコ共和国ボアジチ大学に留学。出版社勤務を経て2019年に独立。2021年に小さな出版社どく社を仲間と立ち上げる。

どうして人は、何かを残したいと思うの？

菊地暁さんの答え

『ライフヒストリーレポート選』書影

伐採した木材を川に流す（昭和10年代、樺太）

毛皮をとるために飼っていたアンゴラウサギ（昭和10年代、長野県）

※写真はいずれも『ライフヒストリーレポート選』より

世田谷といえば、泣く子も黙る民俗学のゴッドファーザー柳田国男が後半生を過ごした土地である。その世田谷でユニークな活動を続ける生活工房から寄稿依頼をいただいた。断る選択肢はない。

ただ、「どうして人は残したいと思うのか」というご依頼のテーマは若干補足が必要だろう。すべての人が「残したい」と思うとは限らないからだ。過去を残す手段は記号（文字）、モノ、身体（記憶）の3つに大別されるが、文字やモノを残せたのは特権階級に限られ（ヤバめの記録は一生懸命廃棄されるようだが）、庶民の大半は口伝えの記憶以外の手段がないという時代が、人類史の大部分を占める。庶民が自らの過去を文字で残せるようになったのは公教育がはじまる近代以降であり、さらに写真や映像が残されるのは、それらのメディアが普及したここ100年程度のこととなる。スマホの画像データやSNSの過去ログが溢れかえるようになったのは、長きにわたる人類の歴史からすれば、ほんの一瞬の出来事だ。

なので、記録はたくさん残されているようだが、よく見ると意外と少なく、とりわけ、庶民の暮らしに関わるものが少ない。これを何とかしなければ。言い伝えやしきたりとして庶民に受け継がれた暮らしの記憶を早急に記録保存しなければ、庶民の来し方がわからず、したがって、行く末を占うことも危うくなる。そう考えたのが柳田国男であり、その解決策が民俗学だった。

中央大学水泳部（昭和30年代、東京）

ナガスクジラ上での記念撮影（昭和30年代）

なすべきタスクは無数にある。衣食住から仕事や人付き合いに至るまで、私たちの日々の暮らしは、際限なき雑事の連鎖で出来上がっている。おまけに、一人ひとりそれぞれ違う。記録すべき対象は無限に広がっているわけで、だからこそ、無理のない範囲で、できるだけ多くの人の手を募って、じっくりと取り組むことが大切になる。

筆者が取り組んでいるのは「ライフヒストリーレポート」というプロジェクト。筆者が担当する民俗学講義の期末レポートとして、おじいちゃん・おばあちゃんにインタビューして生活史（平たくいって伝記）を書くという課題を課しているのだ。最初はかったるく感じる学生さんも少なくないが、やってみると、それぞれに新たな発見があり、最後は感謝されることが多い。講師一人が読むだけではもったいない魅力的なレポートの数々を、著者と話者の許可をとって、『ライフヒストリーレポート選』という小冊子にまとめることとした。今年度で10冊目となる。非売品だが、大学図書館や国会図書館に収めてあるので、ご関心の向きにはぜひご覧いただきたい。

これらの生活史は、著者（受講生）と話者（その祖父母）の対話の記録であり、生活の総体からすればささやかな部分に過ぎない。にもかかわらず、その部分を丁寧に記録することが、描ききれなかった「総体」を想起する手がかりになるのだと思っている。学生さんの学びに支えられながら、筆者も学び続けていきたい所存だ。

きくち・あきら
民俗学者。京都大学人文科学研究所助教。北海道小樽市生まれ。札幌市育ち。京都大学文学部卒。大阪大学大学院文学研究科修了。博士（文学）。著書『民俗学入門』（岩波書店）、『学校で地域を紡ぐ』（小さ子社、共編著）、『今和次郎「日本の民家」再訪』（平凡社、共著）など。

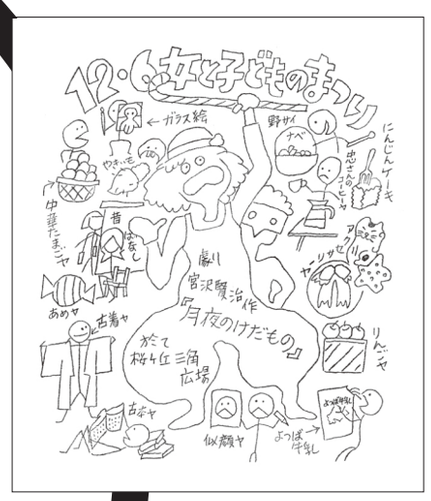
アミ族の観光施設で民族衣装を着る（1960年代、台湾）

新婦が婚家に入る際に足を洗う（1964年、京都府）

体育祭で文化大革命の仮装をする（1967年、兵庫県）

日々の実践を積み重ねた先にあるものって？

平野公子さんの答え



SETAGAYA MaMa

ひらの・きみこ
1945年東京神田生まれ。メディア・プロデューサー。20代の頃から演劇、出版、ライブなどの裏方として働く。2005年から13年まで、神楽坂で小劇場シアターイワトを企画運営。2021年に他界した、夫であるグラフィックデザイナー平野甲賀の画文集『平野甲賀と2』を、本年4月horo　booksより刊行。2023年にはセタガヤママに関連する展覧会を生活工房で開催予定。

私が世田谷のマンションに越してきて、最初に悩んだのが、6歳と3歳のふたりの子どもたちをどうやって近隣の子どもと遊ばせることができるのか、ということでした。1976年のことです。

そこで、我が家にたくさんある絵本を見に来てもらう、借りに来てもらう、好きなだけその時間は遊んでいってもらう日をつくりました。「子どもザウルス」のはじまりです。その日は、ドアの取手に「誰でもどうぞお入りください」と書かれた木彫りの札をかけて待ちました。学校、幼稚園帰りの友達が、同じマンションの子どもたちがおもしろがってバタバタと入ってくる。その日の我が家には、子どもたちに出すおやつの匂いと、子どもの出すひなたの匂いが充満していました。

そのうち熱心に来ていただいていたママのおひとり、大橋正子さんと私は、暮らしのこと、絵本や物語、遊び歌のことなどじっくり話し込むようになりました。「ただこうして集まっているのではなくて、もう少し動的な活動にしたいね」と話し合い、ふたりは友人の家の広間を月に一度お借りして、時間を決めて集まり、30〜50人の子どもの前で、読み聞かせ、語り、紙芝居、お面劇などをはじめたのです。それが「あめの会」です。

何かはじめると、お知らせが必要です。当時出回っていたプリントごっこで毎月のあめの会のお知らせをデザインしていたのが、平野甲賀です。刷るのは80枚ほどですが、かなり凝って楽しんでいました。現在残っていないのが残念です。

ほかにも、1980年からお母さんたちが日々のことをつづった通信をガリ版で発行しはじめました。こちらは田上正子さんが主となり、慣れないガリ切りからマスターしていったのです。そして、なんとガリ版の通信は「あめつうしん」という名前で現在も続いています。

あめの会は、子どもたちと梅ヶ丘の冒険広場へ遠征して、唄遊びや劇遊びも開催しました。また、桜ヶ丘の三角広場の真ん中に大きな焚火を起き、そのまわりで子ども市を開いたことも。当時の様子は今でも目に浮かびます。

大橋正子さんは、その三角広場近くのご自宅前にログハウスを建てて、カフェと自然食品の店「セタガヤママ」を開店しました。地域で人気のユニークな店は2008年まで継続。

マンションの一室からはじまった20代後半のママたちの冒険は、意外な広がりを生んでいったのです。

時を超えて伝える方法とは？

吉田勝信さんの答え

今から10年ほど前、山形県南部の川西町玉庭地区をフィールドワークしている際に獅子舞と御神輿に出くわした。どこの神社か覚えていないが、小さなお祭りで子ども神輿だったと思う。お話を伺うと、このお祭りは実は100年くらい行われなかった期間があって、数年前に再開したのだという。そのときヒントとなったのが、当時のお祭りの準備物などの目録や社に奉納されていた獅子頭、口伝だ。隣の地区の似たような祭事をもとにして、かつてのお祭りの様子を想像し、組み立て直したというのだ。

川の対岸に住む隣人は、川を挟んで鏡合わせのように同じ生活を営んでいる。ただ、鏡と異なるのは、どちらかが消えても隣人の生活や祭事は無くなることはなく、むしろ隣人の営みを見ることで、一方が忘れてしまった文化は蘇るということだ。

暮らしから立ち上がっている文化というものは、こうやって消えたり現れたり、100年くらいは揺らぎながら何となくつながっているものなのだろう。それがまた現れるきっかけは物にあった。物は開かれているものだと思う。ついつい忘れがちだが、紙や道具といった文字資料や実物資料は時間をまたいで、過去から現在へ、現在から未来へと開かれている。当時の祭事の道具がその実態を記録し、のちに祭事を忘れてしまった時代に再生させることができる。

また、物はもう少し別な方向へも開かれている。

私が住む町の隣、山形県中山町の民族資料館には、オナカマサマの展示コーナーがあり、彼女たちが修行した洞窟の写真や仕事道具が展示されている。オナカマサマは、簡単に言うと恐山のイタコのような存在で、昔は村山盆地全域に居たらしい。盲目の女性たちの生業だった。激しい修行の末に一人前になると、先達から道具を渡されるのだそうだ。そのなかのひとつである数珠は、黒い木の実を基本に、熊の牙や爪、貝殻に紐を通したもの。それぞれのパーツは角が落ち、擦り合わせてじゃらじゃらと鳴らして使ったことを想像させる。禍々しい美しさがあり、シャーマン的な凄みが視覚的に伝わってきた。

だが、それを扱う人は盲目である。オナカマサマの道具を誰がつくったのかは定かではないが、仕事道具である以上、少なくとも本人や先達などは関わっているだろう。そう考えると、「禍々しさ」のようなものを聴覚／触覚／視覚が重なるところで表現した物がこの数珠と言えるかもしれない。

このことは、物がそこにあることで、見る／読む以外の言語へ開かれていることを示している。私はこういった“物”的な開かれ方をインターネット上へも持ち込めないかと考えているが、なかなか難しい。サーバーにアップロードするだけで電力を消費するのだ。100年の時をまたごうと思ったら、一体どれだけのコストがかかるのかと呆然としてしまう。また、視覚以外の言語へ置き換えることも想像がつかない。

私はデザインという名前で物をつくっていこうと思う。

よしだ・かつのぶ
1987年東京都新宿区生まれ。山形県を拠点に採集、デザイン、超特殊印刷を行っている。名前の「吉」は（土に口）。

生活と記録を考える
BOOK REVIEW

世田谷区の本屋さん、
「記録と生活にまつわる問答集」に、
おすすめの本を教えてください！

『私みたいな者に飼われて猫は幸せなんだろうか？』

能町みね子さんが猫を飼うまでの徹底した迎え入れ準備や飼ってからの溺愛ぶりをつづった日記的エッセイ。猫のいる生活、憧れます。もちろん憧れだけでは飼う資格がないことは理解しつつ。

能町みね子 著／サムソン高橋 写真（発行・東京ニュース通信社／発売・講談社、2022年）

古書ビビビ／世田谷区北沢1-40-8 土屋ビル1F

『日記をつける』

窓際でひなたぼっこするような、生活の凪の時間。日記という外部化された記憶は、その淡く消えやすい尊さを保つことができる。

荒川洋治 著（岩波書店、2002年）

日記屋 月日／世田谷区代田2-36-12 BONUS TRACK SOHO9

日々の生活のなかで移ろう季節とともに切り離せないお祝いやならわし。しばわんことみけにゃんの色鮮やかなイラストで描かれ、大切にしたい日々をさらに豊かにしてくれる一冊。

『しばわんこの和の行事えほん』

えほんのみせ ぱっきゃまらーど／世田谷区世田谷4-13-20 松陰PLAT1-A

川浦良枝 著（白泉社、2014年）

『一万年生きた子ども』

ナガノハル 著（現代書館、2021年）

子ども時代、母のケアのために子どもとして生きることを失った著者が自身の半生を振り返る。過去を記録することには、今の自分を抱きしめる力があると感じた一冊。

本屋B&B／世田谷区代田2-36-15 BONUS TRACK2F

『失踪日記』

吾妻ひでお 著（イースト・プレス、2005年）

漫画家吾妻ひでお、人生の記録（日記！）。人生に壁を感じていませんか？　記録することで壁を乗り越えられるとしたら？あなたの人生は思いのままです。

TSUTAYA三軒茶屋店／世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー2F

『黒雲の下で卵をあたためる』

小池昌代 著（岩波書店、2019年）

歩く。生きる。詩人の目を通した世界と心にとどまっていく。体験を希求する枝葉はゆっくりと深部へ向かい、こちら側へもその指先を伸ばしはじめる。

七月堂古書部／世田谷区豪徳寺1-2-7 三枝マンション1F

『町の職人』

斎藤隆介 著（文藝春秋、1969年）※絶版

人々の生活を影で支えた無名の職人たちを記録した渾身のドキュメンタリー。失われた技術が一人ひとりの物語のなかに見え隠れするおもしろさ。これぞ職人生活誌。

クラリスブックス／世田谷区北沢3-26-2-2F

『はりえ日記一』

宮脇綾子 著（京都書院、1979年）※絶版

宮脇綾子がアップリケ作品やデッサンとともにつづった日記集。野菜・花・魚など身近なものをモチーフにした作品は、ただそこにあるものの美しさを改めて思い出させてくれます。

nostos books／世田谷区砧5-1-18 102号室

世田谷文化生活情報センター
生活工房
Lifestyle Design Center

編集後記

生活工房では、1年間の活動をまとめた記録・報告書として毎年アニュアルレポートを発行しています。開館25周年の節目を迎え、今年度は大幅なリニューアルを検討していました。そんななか芽生えた、素朴な疑問「そもそも生活は文字や形に残らないものなのに、どうして生活工房は毎年記録集をつくるんだろう？」

「アニュアルレポートはこうあるべき！」という呪縛から逃れ、記録のあり方やつくり方、届け方を含めて、自由な発想で考えていきたい。そんな想いを胸に、まずは、さまざまな実践者の声に耳を傾けようと「生活と記録の問答集」をつくりました。私たちの暮らしと地続きにある、生活を記録すること。さまざまな声を手がかりにして、読者のみなさまも、いろいろなアイデアが浮かんでいるかと思います。

そこで、本特集の感想、生活を記録することにまつわる思い出、「こんなアニュアルレポートがつくれたらおもしろいんじゃない？」という声ををぜひ編集部にお寄せください。今後の生活工房の「記録」について、ともに考える機会になればと思っています。

ちなみに編集会議では、こんなアイデアが！

- 「残らない記録集」として、水に溶ける紙でつくる。文字や形は消えていくけど、所有者が読み伝えることで、次の世代へとつながっていく。まさに、生活を体現化するってことにならないかな。読んだ人の記憶には残るだろうし。
- 読んだ人の痕跡が残っていくような記録集がつくれたらおもしろそう。人から人の手に渡っていく回覧板、受け取った人により書き込みが増えていく交換日記にヒントがもらえるかも。
- 展示やワークショップに参加して終わり、ではなく、その後の暮らしに響いた影響も含めて記録できるとおもしろそう。
- 報告書でもあるので、1年の終わりに着手するけれど、春から1年間かけて記録集をつくることもできるかもしれない。
- 長く残したいのであれば、紙じゃなくて石に刻みますか！

特集

-
時短レシピから省かれたのは 本当に時間だけ？
小桧山聡子

-
日記に残すこと、残さないこと。
どうやって決めているの？
植本一子

-
動物や植物も記録するのかな？
片野晃輔

-
生活を記録してきた先輩って？
大竹嘉彦

-
生活の記録を集めると、何が浮かび上がる？
辻本力

-
記録することで、見えなくなるものって？
松本篤

-
生活を記録することに意味はあるの？
末澤寧史

-
どうして人は、何かを残したいと思うの？
菊地暁

-
日々の実践を積み重ねた先にあるものって？
平野公子

-
時を超えて伝える方法とは？
吉田勝信

-
生活と記録を考えるBOOK REVIEW
えほんのみせ ぱっきゃまらーど／クラリスブックス／
古書ビビビ／七月堂古書部／TSUTAYA三軒茶屋店／
日記屋 月日／nostos books／本屋 B&B

「生活と記録にまつわる問答集」企画の提出先

◎オンラインで↙　◎お手紙で↓

〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー内
公益財団法人せたがや文化財団　生活工房

西村佳哲氏によるオリエンテーションの様子

校正の仕事について語る牟田都子氏

SEMINAR

本企画の記録
映像はウェブサイト
で公開中

どう？就活

自分と仕事の出会い方

20代女性の声●
ずっと忘れたくない言葉が自分のなかに溜まってゆく時間は、なんだか久しぶりで幸せな気持ちです。

参加者の質問に応える東野華南子氏（写真左）

自分と仕事の出会い方について語る本城慎之助氏

自身の就活体験を語る団遊氏

その人の存在が表れた、いい仕事に出会うとき

社会で働くことや将来の生き方について、疑問や悩みを抱く若年層に向けたセミナー。働き方研究家の西村佳哲氏の穏やかなファシリテートのもと、ゲストが「働くことや仕事との出会い」について体験を語るとともに、参加者同士の対話時間も設けて考えを深め合った。

【1日目】本城慎之介氏は、仕事を心から楽しむ2名の印象的な人物について語り、牟田都子氏は、「校正は飽きる暇はない。毎回新鮮で名残惜しい」と仕事への敬意や熱意を語った。丁寧な仕事に触れたときに生まれる「嬉しさや清々しさ」などの感情に目を向けることで、仕事という概念の輪郭が浮かび上がる対話となった。

【2日目】東野華南子氏は、会社を生態系や土になぞらえ、社員一人ひとりとの信頼関係の築き方について自らの体験を、団遊氏は、自身が創業した「人の成長」を目標としたユニークな会社を紹介しながら、利他的思考で仕事をする意義について語った。

「体と夢を壊さない程度に頑張る。たとえ壊れたとしても治るし、直せる」という本城氏の言葉は、就職や転職を控えた若者に寄り添う温かいエールとなった。彼らが多様なかたちで仕事と出会い、そしていつか仕事の魅力と奥深さに心震える瞬間が訪れることを願いたい。

DATA

働くってなに？

開催日時
2021年12月4日㊏
13:00〜18:30

講師
西村佳哲（働き方研究家）、本城慎之助（学校法人軽井沢風越学園理事長）、牟田都子（校正者）

参加人数
68名

会社ってなに？

開催日時
2021年12月5日㊐
13:00〜18:30

講師
西村佳哲（働き方研究家）、東野華南子（リビルディングセンタージャパン取締役）、団遊（アソブロック株式会社創業者）

参加人数
42名

会場
ワークショップルームB

参加費
1,000円

対象
10〜40代

企画・制作
リビングワールド

団地のコミュニティ 赤羽台団地　提供：UR 都市機構

都営横川5丁目アパート©大山顕

豊かな緑に包まれる常盤平団地のスターハウス

山本理顕氏の講演の様子　撮影：山本華

暮らしの創造

団地文化から考える公・共・私

講師（左から）
上段：照井啓太氏、大山顕氏
中段：千葉敬介氏、饗庭伸氏
下段：原武史氏、山本理顕氏（撮影：山本華）

暮らしの源流に想いをめぐらせる

日本人のライフスタイルの変化と深く関わる、団地の歴史と文化を多様な視点から紐解くセミナー。

1日目は照井啓太氏が、団地の創世記から現代に至るまでの歴史や暮らしの変遷について概説。大山顕氏は、団地を舞台とした映画や漫画などの作品から、団地と都市の関係について評説した。

2日目は千葉敬介氏が、新時代の団地暮らしや、まちと人とのつながりを創出させる事業例を紹介。饗庭伸氏は、多摩ニュータウンを例に、団地によって都市につくられた独特な地形や近現代の都市計画論について解説した。

3日目は原武史氏が、1960〜1970年代の日本で革新的な政治意識を支える基盤となった団地空間とその共同体について講じた。山本理顕氏は、日本の団地や集合住宅の源流、および「1住宅＝1家族」を前提とした現在の住み方の起源を西欧の建築思想史をたどりながら解説。最後には、現代の日本の住宅システムに代わる新たなライフモデルとして「地域社会圏」という暮らし方を提示した。

DATA

団地概論
メディアとしての団地

開催日時
2022年2月13日㊐
13:00〜18:30

講師
照井啓太（団地愛好家）
大山顕（写真家／ライター）

参加人数
25名

団地と街と暮らしの関係
団地がつくりだした地形

開催日時
2022年2月26日㊏
13:00〜18:30

講師
千葉敬介（東京R不動産）
饗庭伸（都市計画学者）

参加人数
12名

団地の共同体と思想
団地と地域社会圏

開催日時
2022年2月27日㊐
13:00〜18:30

講師
原武史（政治学者）
山本理顕（建築家）

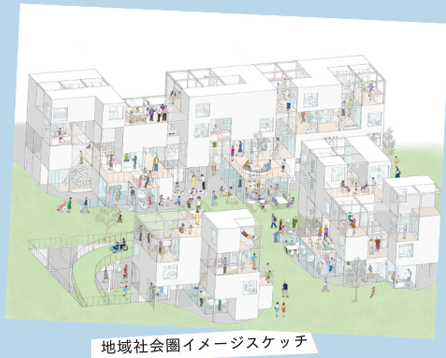
参加人数
30名

会場
セミナールームAB

参加費
4,000円

※新型コロナウイルス感染症の影響により、定員を50名から30名に変更した

30代男性の声●
生活についてマニアックだがクリティカルな視点で切り込む内容だったので、上面だけでなく本質的な話を聴くことができた。



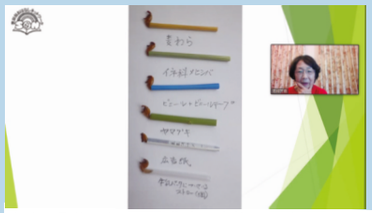
地域社会圏イメージスケッチ

ワークショップ WORKSHOP

今年はオンライン開催だよ！
第20回おはなしいっぱい

10代＆40代の声●
夏休みの最後に、ゆっくりした時間を家族で過ごすことができました。

絵本作家・山口マオ氏によるトーク


ナチュラリスト・絵本作家の高柳芳恵氏による「せみセミナー」

出演者：わらべうたの会“トトケッコー”

世田谷おはなしネットワークのメンバー

絵本作家・絵本コーディネーターのこがようこ氏による絵本の読み聞かせ

夏の恒例イベントは初のオンライン開催！

「世田谷おはなしネットワーク※」との共催事業は、今年で21回目を迎えた。新型コロナウイルス感染症の影響により2020年度の「おはなしいっぱい」は中止になってしまったが、今年はオンライン開催に変更して、3日間の配信を行った。子どもに人気の絵本作家や世田谷区内で活動するおはなし会のグループなどが出演して、多彩なプログラムを実施。親子や三世代で参加した方も多く、外出に不安がある方々も安心して楽しめるイベントになった。また、配信の視聴だけにとどまらず、少しでも能動的に参加してもらえるように参加者からゲストへの質問を受付して、Instagramなどで回答を公開した。世田谷おはなしネットワークにとってSNSの運用は初めての試みではあったが、フォロワー数は順調に増えている。今後もおはなし会の告知や地域の連携などに活用していく予定だ。

※1997年活動開始。世田谷区内で活動する複数のおはなしの会が連携し、図書館などで活動中。現在、60のグループ・個人会員から成る

DATA

開催日時
2021年8月25日㊌・26日㊍・27日㊎
13:45〜15:40
※Zoomウェビナーによるオンライン開催

会場
セミナールームAB（配信場所）

出演
山口マオ（絵本作家）、高柳芳恵（絵本作家）、こがようこ（絵本作家）、わらべうたの会“トトケッコー”、わらべうた勉強会

対象
幼児〜小学生（親子でも参加可）

参加人数
1,054人

参加費
無料

共催
世田谷おはなしネットワーク

色の配色、香りなどからキャンドルホルダーをつくったのは初めてで、とても楽しく行えた。普段アートに触れる機会はないので、貴重な体験ができてよかった。
20代女性●

世田谷アートフリマpresents
1DAYワークショップ

WORKSHOP

ものづくりの楽しさをじっくりと味わう

2003年より開催している「世田谷アートフリマ」は、手づくりの雑貨・イラスト・写真など、作品づくりを楽しむ市民の発表・販売の場として、また出展者同士や来場者との交流の場として人気のイベント。新型コロナウイルス感染症の影響により、例年通りの開催はできなかったが、特別編として世田谷アートフリマゆかりの作家３名によるワークショップを開催した。

「ジェルワックスを使ったキャンドルホルダーづくり」では、花や貝殻などの素材をガラスに配置し、色と香りを付けた蝋で固め、美しいキャンドルが出来上がった。「シルクスクリーンプリントでつくる手ぬぐい＆バッグ」では、参加者が描いた絵や言葉をデジタル製版してプリントし、POPなバッグと手ぬぐいが仕上がった。「縫わずに作る、かわいいレザーポーチづくり」では、革細工専門の工具を使ってオリジナルポーチをつくり上げた。

少人数制のため、参加者が工夫やアイデアを存分に盛り込みながら、作家とともにものづくりの楽しさをじっくり味わう一日となった。

DATA

開催日時
2021年9月18㊏
①11:00〜12:30／②13:00〜14:30／③15:00〜16:30

会場
市民活動支援コーナー

対象
中学生以上（小学生は保護者同伴）

企画制作
世田谷アートフリマプロジェクト

2ジェルワックスを使ったキャンドルホルダー制作風景
9

関連企画1
ジェルワックスを使った
キャンドルホルダーづくり

講師
asami（キャンドルアーティスト）

5参加人数
7名

参加費
4,500円

シルクスクリーンで手ぬぐいにプリントする様子

関連企画2
シルクスクリーンプリントでつくる
手ぬぐい＆バッグ

講師
TReC1and2（旅するクリエイター）

参加人数
4名

参加費
3,000円

革細工の工具を使ってポーチを制作する様子

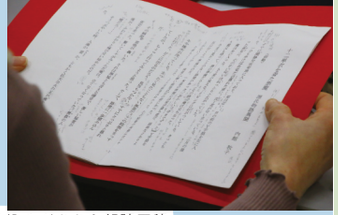
関連企画3
縫わずに作る、かわいいレザーポーチづくり

講師
ゆげたかひろ（革小物作家）

参加人数
4名

参加費
4,000円

講座の様子（2020年2月）



書き込みがされた朗読原稿

豊かなことばの世界 朗読講座

朗読に聞き入る受講者（2020年2月）

日本語の響きを味わう

経験豊かなNHK日本語センターのアナウンサーとともに文学作品の朗読を学ぶセミナー。作品の世界観を大切に、一つひとつの言葉の響きや表現方法について丁寧に指導する。講師が、抑揚やスピードなどを実際に朗読して示すと、驚くほど受講者の朗読に深みが生まれる。コロナ禍の開講にあたり、事前に受講者が朗読の録音を提出し、各自の朗読を再生しながら指導するなど、新型コロナウイルス感染症対策として、さまざまな工夫がなされた。忙しい日常のなかで、良質な文学作品をじっくりと味わいながら朗読することは、参加者にとって特別な時間となった。

◎以下、取り上げた作品
浅田次郎『雛の花』
堀辰雄『辛夷（こぶし）の花／浄瑠璃寺の春』
夏目漱石『三四郎』
北大路魯山人『春夏秋冬 料理王国』
太宰治『リイズ』
乃南アサ『Eメール』
江國香織『デューク』
宮部みゆき『謀りごと』
遠藤周作『勇気ある言葉』

DATA

年3回（4月期／7月期／12月期）
各４講座（㊌午前／㊌午後／㊍午後／㊎午後）
※新型コロナウイルス感染症の影響により、2022年2月期および朗読発表会は中止した

会場
セミナールームA

講師
一般財団法人NHK放送研修センター日本語センター

参加人数
508名

参加費
20,800円（4回分）／
アーツカード会員は18,800円

共催
一般財団法人NHK放送研修センター日本語センター

名作を題材に音で表現する楽しさに触れる

丁寧な指導のもと、声の出し方や表現方法を学ぶ

40代の声●世田谷のまちづくりの歴史に触れる貴重な時間だった

ちかくのとーくvol.00
みんなで話す、世田谷の市民活動のこと

市民活動支援コーナーで印刷したチラシ　デザイン：土屋勇太

**ちかくの活動を
ちかくの人に紹介する、
とーくシリーズ。**

市民活動支援コーナーの一角で、身近なソーシャルグッドを紹介するトークシリーズ「ちかくのとーく」が今年からスタート。地域の課題を解決するための活動や、世田谷ならではのユニークな試みを行う方をゲストに招き、その取り組みを紹介していくシリーズだ。

今回は、そんなトークシリーズのキックオフとして開催。まちづくりデザイナーの千葉晋也氏、子育て支援コーディネーターの松田妙子氏をゲストに招き、世田谷社の市川徹氏が聞き手となって進行した。世田谷の市民活動の歴史について、1970年代を起点に現在まで振り返った前半は、年表によるマクロな視点から、三者三様の世田谷との関わり方といったミクロな話題まで幅広く語る時間に。「ぶりっじ世田谷」の取り組みなど、世田谷の市民活動の懐の深さを改めて確認する機会となった。

後半は、次回以降のテーマやゲストを参加者と一緒に考える公開ミーティングを実施。まちづくり、福祉、劇場など、さまざまな分野からアイデアが出された。

イベントの様子。左から市川氏、千葉氏、松田氏

DATA

開催日時
2022年1月23日㊐
14:00〜16:00

会場
市民活動支援コーナー

聞き手
市川徹（まちづくりコーディネーター）

ゲスト
千葉晋也（まちづくりデザイナー）、
松田妙子（子育て支援コーディネーター）

参加人数
会場参加9名／オンライン参加19名

参加費：無料

オンラインと会場のハイブリッドで開催

20代女性の声●一人ひとりの経験や記憶が見え、共有化されていく。

穴アーカイブ
せたがやアカカブの会／エトセトラの時間 見えるものと見えないものを語る会
8ミリフィルムをめぐる記憶と言葉etc.

DATA

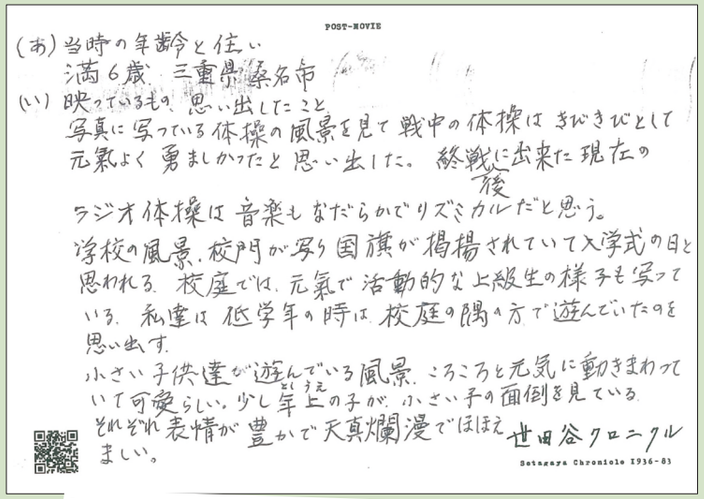
せたがやアカカブの会

開催日時
2021年6月8日㊋・8月7日㊏・10月8日㊎・12月8日㊌・2022年2月8日㊋・4月8日㊎
※ハガキの受付締切日

参加人数
38枚 ※2月8日時点

参加費
無料

企画制作
remo[NPO法人記録と表現とメディアのための組織]


POST-MOVIE
(あ) 当時の年齢と住い
満6歳　三重県桑名市
(い) 映っているもの、思い出したこと
写真に写っている体操の風景を見て戦中の体操はきびきびとして元気よく勇ましかったと思い出した。終戦後に出来た現在のラジオ体操は音楽もなだらかでリズミカルだと思う。
学校の風景。校門が写り国旗が掲揚されていて入学式の日と思われる。校庭では、元気で活動的な上級生の様子も写っている。私達は低学年の時は校庭の隅の方で遊んでいたのを思い出す。
小さい子供達が遊んでいる風景。ころころと元気に動きまわっていて可愛らしい。少し年上の子が、小さい子の面倒を見ている。それぞれ表情が豊かで天真爛漫でほほえましい。
世田谷クロニクル
Setagaya Chronicle 1936-83
「せたがやアカカブの会」で集まったハガキ

世田谷区民から提供いただいた84巻の8ミリフィルムを、ウェブサイト「世田谷クロニクル」で現在公開している。映像の利活用の一環として、「せたがやアカカブの会」遠隔開催のほか、新規プログラムとして視覚障害者の方と一緒に映像を観る「エトセトラの時間」を開催した。

「せたがやアカカブの会」では、隔月で映像と関連するエピソードを募集。「向ヶ丘遊園閉園の日（中略）なごりおしくて私は孫と一緒に出掛けた」「夏休みの宿題に氷川丸の絵を提出した」など、映像を介して集まった言葉は各回の会報誌にまとめて返送。オンラインでも公開した。

「エトセトラの時間」は、目の見える人、見えない人、障害の有無にかかわらず多様な背景をもつ人が集まり、映像をオンラインで鑑賞するプログラムだ。撮影や編集の意図からはみ出した、「エトセトラ」の数々が映り込む無音の8ミリフィルム。流れる映像に言葉を添えながら、参加者同士で対話を深める時間を過ごした。

「エトセトラの時間」では映像2本を視聴

エトセトラの時間

開催日時
2022年2月23日㊌㊗
14:00〜16:30
※Zoomによるオンライン開催

講師
視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ

参加人数
6名

参加費
無料

企画制作
remo[NPO法人記録と表現とメディアのための組織]、視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ

『向ヶ丘遊園』（1961[昭和36]年5月3日／向ヶ丘遊園／3分59秒）

『流鏑馬』（1962[昭和37]年9月16日／鎌倉鶴岡八幡宮／3分28秒）

LOCAL COMMUNITY

移動する中心|GAYA

特設ウェブサイト　デザイン：PORT

映像を紐解く、月に一度の日曜日。

昭和の世田谷が映し出された8ミリフィルムを公開するウェブサイト「世田谷クロニクル」。本事業は、映像を活用するプログラムとして、NPO法人remoとアーツカウンシル東京、東京都との四者共催で実施している。

今年は、参加メンバーである「サンデー・インタビュアーズ」（SI）と、映像を「みる」「はなす」「きく」オンラインワークショップを開催。個々の視点を持ち寄りながら交流するとともに、その記録はハンドアウトにまとめて「生活工房アレコレ」（p.17）の会場でも配布した。活動の様子は、ライターの橋本倫史氏がnoteでレポート。さらに、SI特設ウェブサイトでは、今年の成果も紹介している。

DATA

開催日時
2021年4月～2022年3月（通年）
ワークショップ計7回　※オンライン開催

特設ウェブサイト
https://aha.ne.jp/si/

参加人数
44人

参加費
無料

主催
東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団
アーツカウンシル東京、remo［NPO法人記録と表現とメディアのための組織］

企画制作
AHA!［Archive for Human Activities / 人類の営みのためのアーカイブ］

世田谷市民活動支援会議

せたがや市民活動 知っ得情報2022

これからの市民活動の在り方とは？

世田谷市民活動支援会議（愛称：Netty（ネッティ））は、世田谷区のNPOやボランティア団体による「より良い地域社会をつくるための市民活動」を支えるネットワーク。世田谷区の市民活動・生涯現役推進課が中心となり、施設運営や助成金の提供、活動相談など、多様なかたちで市民活動を支える中間支援団体で構成されている。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、今年はリモートによる連絡会議（5回）を開催。それぞれの団体の情報交換や講師を招いての勉強会を行い、これからの市民活動支援のあり方を模索した。

また、毎年作成している市民活動に役立つ情報をまとめた冊子「知っ得情報ガイド誌」も発行した。

DATA

ほかの構成団体
社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会、一般財団法人世田谷トラストまちづくり、社会福祉法人世田谷ボランティア協会、NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）、社会福祉法人共生会SHOWA、世田谷区生活文化政策部市民活動・生涯現役推進課

スペースAの様子　撮影：山本 華

DATA

場所
生活工房3F

開館時間
9:00～21:00（休館㊊）

委託先
NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）

来場人数
7,004名（2021年4月1日～2022年3月31日）

LOCAL COMMUNITY

市民活動支援コーナー

さまざまな区民団体をサポートする「活動の場」

市民活動支援コーナーの入口
撮影：山本 華

市民活動支援コーナーは、世田谷区内でさまざまな活動を行っている市民活動団体が登録し、利用する「活動の場」として定着している。2001年10月の開設から今年で20年目を迎えた。

2007年度からは、市民活動支援施設として単なる活動場所の提供にとどまらず、利用団体や社会のニーズに柔軟に対応するために、市民活動団体に運営業務を委託している。日常的な打ち合わせや講座に活用できるほか、印刷機や大判プリンターも利用可能で、活動のためのチラシや資料づくり、幅広い団体の活動情報も掲示・配布できる。

2020年度には改修を行い、木の単管で組まれた間仕切りが特徴的なとても明るいスペースになった。

ここ数年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、区の施設ガイドラインに則った利用の制約があるものの、各団体が新しい生活様式のもとで、それぞれ工夫しながら市民活動支援コーナーを活用し、新たな一歩を踏み出している。

木の単管で組まれた間仕切り
撮影：山本 華

撮影：澤木亮平

数字で見る生活工房

2021.3.2 - 2022.3.31

事業数

事業総数 ── 25件

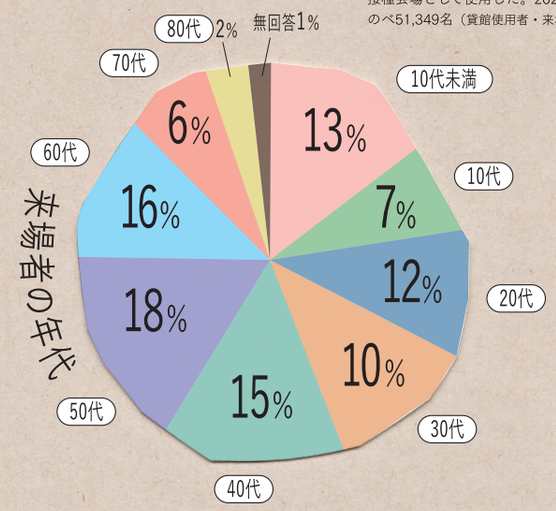
展覧会	7件
展覧会関連イベント	9件
ワークショップ	2件
セミナー・イベント	3件
地域と市民活動	4件

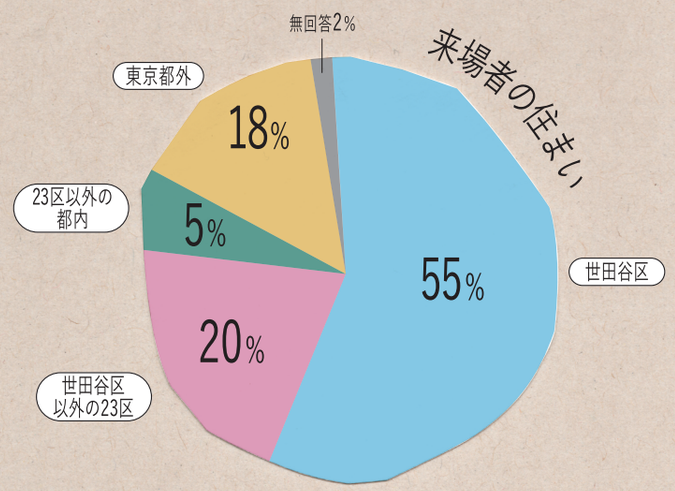
来場者数

来場者総数 ── 212,399人

展覧会	194,908人
展覧会関連イベント	1,055人
ワークショップ	1,069人
セミナー・イベント	682人
地域と市民活動	7,114人
貸館使用者・来場者	7,571人

※来場者数のうち、オンライン参加は1,185名
※4Fワークショップルームは12月1日〜12月28日を除き、ワクチン集団接種会場として使用した。2021年度、当会場で集団接種を受けた人数はのべ51,349名（貸館使用者・来場者数に含めず）



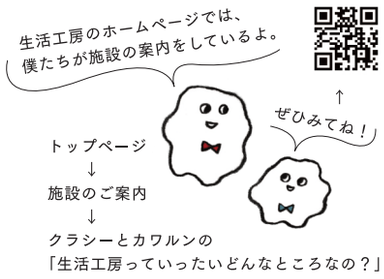


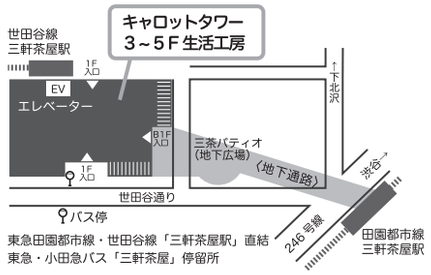
※2021年度来場者アンケート（2021年3月2日〜2022年3月31日）1,355件のデータより

施設ガイド FLOOR GUIDE

生活工房は、地域の人々の活動や発表の場！

多彩な設備を備えたスペースで独自の企画を行うほか、市民団体などにお部屋を貸し出しています。スペースごとに登録条件・利用方法などが異なりますので、詳細はお問い合わせください。





世田谷文化生活情報センター
生活工房
Lifestyle Design Center

休館日 管理休館日	年末年始・月曜日（祝日の場合は除く）
所在地	東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー
TEL	03-5432-1543
URL	https://www.setagaya-ldc.net

RENTAL OK：貸出対象スペース

5F

講演会やミーティングに最適

「セミナールーム」は、講習会や会議に適したスペースです。プロジェクターを含む映像・音響設備も備え、効果的なプレゼンテーションが可能です。A・B各部屋の可動式間仕切りを外せば最大で120名（机椅子使用時は108名）まで収容できます。

セミナールームA RENTAL OK

74㎡／定員48名／利用時間：9:00～22:00

セミナールームB RENTAL OK

83㎡／定員48名／利用時間：9:00～22:00

4F

ものづくりや展示を楽しむ

「ワークショップルームA」は、ものづくりやトークイベントに対応したスペースで、併設されたキッチン（63㎡）には、各種厨房用品も備えています。多人数の交流会にも最適です。
「ワークショップルームB」は、扇形の壁面が特徴的な展示スペースです。可動パネルで室内のレイアウト変更ができ、多様な展示が行えます。音響や映像機器を使った集会などの開催も可能です。

ワークショップルームA RENTAL OK

126㎡／定員50名／利用時間：9:00～22:00

ワークショップルームB RENTAL OK

145㎡／定員50名／利用時間：9:00～22:00

3F

生活工房の展示や市民活動の拠点

「生活工房ギャラリー」は、暮らしのデザインやクラフト、異文化紹介などをテーマに、生活工房が主催する企画展示を行っています（一般への貸出はしていません）。
「市民活動支援コーナー」は、世田谷で活動している市民活動団体が打ち合わせや作業を行うことができるスペースです。印刷機などの利用も可能です（有料）。

生活工房ギャラリー

開館時間：9:00～21:00

市民活動支援コーナー

利用時間：9:00～21:00

About the Lifestyle Design Center

生活工房とは？

暮らし × デザイン の交流拠点

物や情報が溢れる時代。

生活工房は「モノ」だけでなく「コト」に光をあて、
小さな物語に耳を傾けます。
観たり、触ったり、感じたりする体験を通して、
本当の豊かさや、大切にしたい文化を
ともに考える場をつくります。
暮らしの根っこに触れること、
なぜだろうと考えること、
対話することを大切にしています。

Lifestyle Design Center is
the crossroad of life and design.

In an age overflowing with things and information.
Lifestyle Design Center illuminates the intangible
as well as the tangible,
paying attention to small stories.
Through the experience of seeing, touching, and sensing,
we ask: what is true abundance, what is culture?
We value the creation of a space for dialogue,
to touch on the roots of life and ask each other why.

生活工房の事業 Our Program

「展覧会」「ワークショップ」「セミナー」「地域と市民活動」の
4つの事業を主として生活工房は運営されています。
Lifestyle Design Center primarily supports the four programs of exhibitions, workshops, seminars, and local and regional activities.

展覧会 Exhibition

New Discoveries Embellish Daily Life
新たな発見が暮らしを彩る

生活工房ギャラリーやワークショップルームでは、デザインやクラフト、異文化など多角的なテーマで展示を実施しています。

Exhibitions on diversified themes such as design, crafts, and foreign cultures are held in the Seikatsu-Kobo Gallery and the Workshop Rooms.

ワークショップ Workshop

多彩なモノづくりを楽しむ
The Joy of Making Things

A variety of programs are held where participants of all ages can move their hands and bodies as they enjoy "think" and "make" workshops.

参加者が手や体を動かしながら「考え」「つくる」ワークショップでは、子どもから大人までが楽しめる多彩なプログラムを実施しています。

セミナー Seminar

Understanding Society, Enjoying Learning
社会を知る、学びを楽しむ

専門家やクリエイターを招き、暮らしや文化に関する生きた言葉に触れるさまざまな講演やトークイベントを実施しています。

Experience living words on life and culture in various lectures and talk events given by specialists and creators.

地域と市民活動 Local Community

地域とつながる
Connecting with the Region

We assist with region-building by supporting area and regional activities and exchange, widening the circle of various values and sympathies, and creating vibrant networks.

地域の活動と交流を支援し、多様な価値観や共感の輪を広げ、ネットワークを構築し豊かな地域づくりのお手伝いをしています。

ご支援・ご協力いただいた
企業、団体、教育・公共機関など

（各50音順・敬称略）

共催　（一財）NHK放送研修センター日本語センター、NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）、世田谷アートフリマプロジェクト、世田谷おはなしネットワーク、世田谷文学館、東京都、東京工芸大学 色の国際科学芸術研究センター、（公財）東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、remo［NPO法人記録と表現とメディアのための組織］

協力　浅田一憲、安西水丸事務所、大平農園、河村正二、久保田裕子、Klaus Schmitt、クレヴィス、後藤逸男、世田谷区農業青壮年連絡協議会、世田谷233、中央大学 山口真美研究室、等々力の歴史を語り継ぐ会、中野詩、The Natural History Museum (London)、日常探検LABO、ハコスコ、Martin Stevens、若葉会、渡辺宏

助成　芸術文化振興基金、令和3年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業

後援　世田谷区、世田谷区教育委員会、東京工芸大学

次年度のお知らせ　2022年度事業（4〜6月）のご案内

4.27㊌〜5.25㊌　世田谷パブリックシアター開場25周年記念ポスター展
6.4㊏〜7.10㊐　大竹英洋写真展「ノースウッズ 生命を与える大地」

生活工房アニュアルレポートとは——
生活工房の1年間の活動をまとめた記録・報告書です。

生活工房アニュアルレポート2021
発行日：2022年4月30日
編集：多田智美、永江大、鈴木瑠理子（株式会社 MUESUM）、生活工房
デザイン：吉田勝信（吉勝制作所）
巻頭写真：澤木亮平
印刷：今野印刷株式会社＋吉勝制作所

協賛：株式会社東急コミュニティー

※本誌は、過去のアニュアルレポートの誌面を生かして構成しました（pp.21-36を除く）
過去のアニュアルレポートデザイナー
2020　2021.3.31発行　D：Allright Graphics
2019　2020.4.24発行　D：溝端貢
2018　2019.4.20発行　D：片山中藏
2017　2018.4.21発行　D：大原大次郎
2016　2017.4.22発行　D：いすたえこ、堀翼
2015　2016.4.23発行　D：土屋勇太
2014　2015.4.18発行　D：片山中藏
2013　2014.4.25発行　D：グルーヴィジョンズ
2012　2013.3.31発行　D：坂本陽一（mots）
2011　2012.3.31発行　D：Allright Graphics
2010　2011.3.31発行　D：Allright Graphics

発行：公益財団法人せたがや文化財団　生活工房
〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1キャロットタワー
電話：03-5432-1543　ファックス：03-5432-1559
メール：info@setagaya-ldc.net
https://www.setagaya-ldc.net

本書の無断転写、複製、転載を禁じます。
©Setagaya Arts Foundation Lifestyle Design Center 2021-2022
Printed in Japan

昨日はYSKオンラインセミナーで山本理顕氏のお話を。そして本日はこちらに行ってきました。週末のインプット量が多くて、頭パンパン。ただ住むのではなく、まちや暮らしの中で主体的に「住む」ことのリテラシーを醸成していかないといけないという点はごもっとも。気づきの多い講演でした。2月13日

雨の三軒茶屋で偶然出会ったしいきさいこさんの展覧会。じんわり灯る色とりどりの絵と優しい物語にすごく癒されて救われた。最近不安なこと多すぎて心が散り散りになってたけど明日からまたちゃんとしよう　2月13日

PARA SHIFの新しい回観たら読みたい本増えすぎて何も手につかんくなった　8月21日

新代田から歩いて三軒茶屋へ　生活工房さんで展示中の椎木彩子さんの今ばなしを観に行った。小さくて見えづらいけど、赤い絵を中心に３つ並んでる絵がとても好き。絵に使用されていた和紙は、私にとってすごく難しい画材。その和紙に、色彩豊かに描かれた絵はどれも素敵だった。いい日でよかった　1月9日

共に働く場所（コワーキングスペース）を立ち上げて以来、働き方に関心が高まっている。年末だからか身の回りで転職や離職の話を耳にする。12月頭に参加した仕事を考えるワークショップ #どう就活 で衝撃だったのは転職の頻度。20代後半で3社目という人も複数いた。　12月15日

週末のワークショップの感想を読んでいると、「休憩中に、『わたしもそう思った。さっきは質問してくれてありがとう』と質問者に声をかけている人がいてなんだか感動した」という声があった。こんな風な人の支え方もあるな思い、いい気分をわけてもらえた。　12月8日

"本に書いてあることや、会った人のやり方を真似してやってきた"流れに身を任せたら、今にたどり着いた"一夜明けてみて、牟田さんの言葉が思い出される。「自分(一人)で」「自分のやり方で」なんとかしなければと思ってしまうけど、そんなことは無いんだよなって　#どう就活　12月5日

世田谷散歩　前は水族館劇場を見に行ったときに世田谷線に乗りましたが今回はちょっと街歩き。アメリカントイズ展、やっぱり牛が好き🐄素人さんが撮った昔のフィルムが観れるのも良かったし、商店街のレトロ看板も良きでした。　10月18日

寝坊ぶちかましたら午前の診療時間終わっちゃったので近くでやってるアメリカントイズ展きておる！小さめの展示だけどなかなかに見応えありな感じ🥰　11月17日

どん詰まりレイニーサンデー、取りあえず兄姉はAmazonprimeの映画でしのがせ末っ子抱っこ散歩で腰殺られてるトコ　キャロットタワーでオールディーズのアメリカントイの特集やってるので暫し放置中　10月17日

キャロットタワーでやっている、アメリカントイズ展を見に三茶へ。可愛い🥰持っていたおもちゃもチラホラ💕久しぶりにa-bridgeでお茶も。　10月15日

三軒茶屋 生活工房ギャラリー「アメリカン・トイズ」展。フィッシャープライスが特に好きで、昔学校のトムズボックスのお隣にあったアンティークおもちゃ屋さんによく行っていたのを思い出しました。　9月29日

横浜に行く前に三茶キャロットタワー4階の生活工房ギャラリーで #アメリカントイズ展 寄った。https://setagaya-ldc.net/program/520/　小規模だけど魅力的なアンティーク玩具がズラリと、動作中の様子も映像で観られるので、12月まで開催されてるし、時間のある時にまたゆっくり眺めたい。　9月30日

いまテレ東でやってる生活工房のフィルムアーカイブ、すごいボリューム　9月17日

たまたま通りかかったギャラリーでみつけた　日本の昔のおもちゃも展示してて　なんかとてもおもしろかった　そー言えばこんなの実家の蔵にあったなぁって　思いながら懐かしい気持ちになった！　9月10日

東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー
電話：03-5432-1543
https://www.setagaya-ldc.net

世田谷文化生活情報センター
生活工房
Lifestyle Design Center